銭形平次捕物控

お登世の戀人

野村胡堂

青空文庫

一

「親分妙なことがありますよ」

ガラツ八の八五郎は、入つて來るといきなり洒落た懷中煙草入を出して、良い匂ひの煙草を立て續けに二三服喫ひ續けるのでした。

「陽氣のせゐだね。俺の方にも妙なことがあるんだが――」

錢形の平次は、肘枕を解くと、起直つてたしなみの襟などを掻き合せます。

「ヘエー、不思議ですね。親分の方の妙な事といふのはなんで？」

ガラツ八は鼻の下を長くしました。

「八五郎の煙草入に煙草が入つて居るのが妙ぢやないか。その煙草が馬糞臭い鬼殺しでもあることか、プーンと名香の匂ひのする上葉だ。水戸か薩摩か知らないが、何處でくすねて來やがつたんだ」

「驚いたね、どうも。錢形の親分の鼻の良いには」

「お世辭を言ふな」

「實はこの煙草の施主に頼まれて來たんですがね。――凡そこの」

「凡そこの――と來たか。その次は然り而してと來るだらう、煙草と一緒に學まで仕入れて來やがつた」

平次と八五郎は何時でも此調子で、大事な話をトントンと運んで行くのでした。平次とガラツ八の流儀から言へば、無駄話も決して無駄ではなかつたのです。

「からかつちやいけませんよ。――凡そこの、ヘツ又出て來やがつた。學があると、ツイこの地が出るんですね」

「間抜けだなア、まだ學にこだはつてやがる。早く話の筋を通しな」

「ヘエ、――凡そと來たね、下手人のない人殺しといふものがあるでせうか」

「成程そいつは妙だね。下手人がなきや頓死か過ちだらう」

「床の中で過失は變ぢやありませんか。おまけに首筋を刺身庖丁で切られて頓死は開闢以來で――」

「誰だい、それは？」

「本所御船藏前、水戸樣御用の煙草問屋で常陸屋久左衞門が、昨夜自分の部屋で殺されて居るのを、今朝になつて見付けましたよ。石原の利助親分ところのお品さんが、親父の繩張内で起つたことだが、こいつはむづかしさうだから、錢形の親分にお願ひして下さい。動きさうもなかつたら、首根つこに繩をつけても――」

「お品さんはそんな事を言やしめえ」

「ヘツ、その通りで」

「水府の刻みは、常陸屋の店で貰つて來たのか、呆れ返つた野郎だ。どんなに詰めたか知らないが懷中煙草入はハチ切れさうぢやないか」

「煙草入のカマスは大きいに限ると思ひましたよ。今日といふ今日は」

「馬鹿野郎」

「今度お菓子屋に間違ひがあつたら、重箱を背負つて行く」

「止さないか、人聞きの惡い」

錢形平次はそんな無駄を言ひ乍らも、手早く支度をして、八五郎と一緒に神田の家を飛出しました。

本所御船藏前の常陸屋といふのは、その頃水府の煙草を一手に捌いた老舗で、江戸中にも知られた店ですが、殺されたといふ主人の久左衞門はその時五十八歳。頑固一徹で、つむじ曲りで、口やかま

しくて、少しケチで、そしてなか〳〵の商賣上手といふ評判の老人でした。

常陸屋の内外は、石原の利助の子分達が、水も漏らさじと固め。店には老番頭の五助と、若い手代の福次郎が、脅えきつた顏を並べて、平次と八五郎を迎へます。

「早速だが、主人の部屋は？」

「斯うお出でなさいまし」

利助の子分の多吉が、自分の事のやうに先に立つて案内しました。お品によく〳〵言ひ含められたのでせう。

案内された主人の部屋といふのは、店に續いた薄暗い六疊で、其處からはお勝手も女中部屋も近く、土藏に通ふ廊下まで見張れるので、まことに四通八達の要路に當り、奉公人達は蔭口に『鎌倉街道』などと言つて居ります。

障子を開けて入ると、線香の匂ひと共に、ムツと立ち籠めてゐる血の臭ひ。馴れた平次も、思はず敷居際に立ち止りました。

まだ檢屍前で、幸ひ死骸もそのまゝ。平次は念入りに調べ乍ら、昨夜行はれた恐ろしい犯罪の情景を、頭の中に描いて居ります。

秋と言つても、まだ生暖かい時で、薄い夜の物を蹴飛し加減に、主人の死骸は半分床から滑り落ちて居ります。傷は右寄りに喉へ一ケ所、凄まじい血潮を見ると、下手人の手際の恐ろしさは舌を卷かせるばかり。

「これで聲を立てなかつたのかな」

八五郎は平次の後ろから覗きました。

「變な聲を聞いたやうにも思ひますが、何分晝の疲れでよく寢て居りますので。ヘエ」

それに答へたのは、何時の間にやら、後ろからついて來た老番頭の五助でした。もう六十近い年配でせう。顏も聲も皺が寄つて、何んとなく見る影もない老人です。

「お前の寢て居る部屋は近いのか」

平次です。

「いえ、一番遠く離れて居りますが、年寄は主人を除けば私一人で、あとは二十歲臺の若い者ばかりでございます」

老番頭はさすがに長い商賣の掛引で叩き上げたせゐか、見かけよりはシヤンとして居ります。

「戸締りはどうだ」

「此上もなく念入りで御座います。三人で三度に見廻ることになつて居りますから」

「三人で三度に」

「暗くなる時下女のお松が締めて、夕飯の後で私か福次郎が見廻り、それから寢る時主人が手燭を持つて一々調べることになつて居ります」

「それで今朝戸締りに變つたことがなかつたのか」

「少しも變つたところもございませんでした。棧をおろして、輪鍵をかけて、その上場所によつて閂を差して居ります」

「それは念入りだな——が、戸締りに變りがなければ、下手人が家の中に居るといふことになるが」

「ヘエ」

老番頭はさすがにギヨツとした様子で四方を見廻しました。

二

主人の部屋と廊下を隔てて、廣いお勝手があり、其處には脅えた小鳥のやうな、二人の女が縮んで居りました。二十四五のは下女のお松で、これは醜いが正直さうな女。二十歳前後の可愛らしいのが、常陸屋の秘藏娘、お登世といふのでせう。

「昨夜物音を聽かなかつたか」

といふ平次の同じ問ひに對して、二人の娘は少し極り惡さうに頭を振りました。

「主人を怨んで居るものはないか」

平次は一歩突つ込むと、二人は何やら割り切れぬ顏を見合せて居ります。

この問答の間にも平次は、其邊を隈なく探し廻りました。主人を害めたといふ、薄刃のよく切れさうな刺身庖丁の外には、何んの變つたものもなく、窓も、天窓も、入口の建てつけも、嚴重の上にも嚴重を極めて、此處から曲者の侵入した樣子はありません。

秋の陽にクワツと照されて、庭の先に見えるのは二た戸前の土藏で、さすがに今日は煙草の荷の出入りもないらしく、土藏は頑固に扉を閉したまゝ沈默して居ります。

下女と娘の居間の隣が、番頭五助と手代福次郎の寢て居る部屋で、此邊は窓も何んにもなく裏二階へ登る梯子が掛つて居るくらゐですから、晝は通路に使はれて居るのでせう。

「この上は？」

平次は二階を仰ぎました。

「春松どんの部屋になつて居ります。元は若旦那の久太郎さんが休んで居りましたが、若旦那が居らつしやいませんので、主人の甥御の春松どんが休んで居ります」

五助は説明してくれました。

「若旦那の久太郎は何處へ行つて居るのだ」

「ヘエ」

「隱さずに言ふが宜い。いづれは知れることではないか」

平次は突つ込みます。

「若氣の過ちで、親御樣の御氣に反いて、今は六間堀に住んでおいでになりますが――」

「六間堀？」

「親御に勘當されて、お勝といふ小唄の師匠のところへ轉げ込んでゐることは此界隈では誰知らぬものもありません。お勝はそのために、すつかり人氣が落ちて、弟子も皆んな離れてしまひましたが、常陸屋の大身上が後ろに控へて居るので、勘當された若旦那を達引いて離しませんよ。飛んだ貞女で、ヘツ」

利助の子分の多吉は、唾でも吐き度いやうな調子で言ふのでした。

「その若旦那とお勝とかいふ女が、昨夜何をして居たか。八、ひとつ走り石原の子分衆に案內して貰つて、調べて來てくれ。――言ふ迄もないことだが、二人が口を合せるかも知れないから、別々に訊くんだよ」

平次はガラツ八を顧みて、行屆いた指圖をしました。

「親分、言葉を返すわけぢやないが、戸締りは蝸牛のやうに念入りで、外から入つた樣子はないといふぢやありませんか。――六間堀に居る若旦那の久太郎が忍び込んで親殺しをする筈はありません」

「家の中から仲間の者が引入れて、歸つた後の戸を締めて置く術もあるぢやないか。馬鹿野郎」

「ヘエ」

斯う言はれると一も二もありません。ガラツ八は利助の子分二三人と宙を飛んで行きます。

丁度それと行違ひに、二十五六の若い男が一人、汗を拭き〳〵歸つて來ました。生暖かい秋の陽は西に傾いて、この男の健康さうな肩から頬のあたりを照らすのが、如何にも頼母し氣に見えるのでした。

「番頭さん、お寺の方は心得て居ますよ。今夜はお通夜の坊さんが來る筈で」

若い男は番頭の五助に挨拶して、輕く平次と多吉に目禮するのでした。

「お前は？」

「春松と申します。甥といふことになつて居りますが、もう少し遠い親類で。ヘエ」

春松はこんな事を言つて、磊落らしくカラカラと笑ふのです。

「昨夜は何處に居たんだ」

「恥を申さなきやなりませんが――この二階に追ひ上げられて、梯子を引かれてしまひましたよ」

「それはどういふわけだ」

平次は少し面白さうでした。

「毎晩家をあけるんで、叔父をすつかり怒らせてしまつたんです。二三日前から二階に追ひ上げられて、梯子を引いた上、下の部屋には番頭さんと福次郎どんが、唐獅子のやうにがん張つて居るんです。いくら私が遊び好きでも、脱け出せやしません」

春松はさう言ひ乍ら、面目なささうに、ポリポリと小鬢のあたりを掻くのです。時も時、少し不謹愼と言へば不謹愼ですが、正直で無造作で、なか〳〵に好感の持てる態度です。

「毎晩、何處へ行くんだ」

「親分、勘辨して下さい。私はまだ若いんですもの」

春松は愈々以つて參つてしまひます。

三

その次に平次の逢つたのは、下女のお松でした。赤ら顔の丈夫さうな女で、調子の高い、明け放しな感じが、頭の醜くさをカヴアーして、妙に人を親しませます。

「お嬢さんは好いきりやうだが、縁談の口はあるのか」

「長し短かしで、まだ決らない樣子ですよ。尤も春松どんがお聟さんになるといふ話もありましたが、お嬢さんの方で嫌がるので、近頃は春松どんは自棄になつて遊んでばかり居ますよ」

「手代の福次郎は？」

「近頃はお嬢さんに夢中ですが、これもお嬢さんの方で嫌つて、逃げ廻つてゐるやうです」

「有難う。それで、いろ〳〵の事が判つたよ。ところで、昨夜何にか變つたことがなかつたのか」

平次は妙なことを尋ねます。

「え、さう言へば、妙なことを聽きました」

「妙なこと？」

「御勘當同樣の若旦那樣が、番頭さんのお口添へでお詫びにいらつしやいましたが、旦那樣は大變なお腹立ちで、――今となつては本

當の事を打ちあけて言ふが、お前は私の本當の子ではない。亡くなつた女房の妹の子を、藁のうちから貰つて育てたのだ。嘘だと思ふなら、五助に訊いて見ろ。この常陸屋の身代は、娘のお登世に婿を取つて譲るから、お前などに寄り付いて貰ひ度くない。小唄の師匠なり、總嫁なり勝手な女と一緒になつて、何處へでも行くが宜いと、それは大變なお叱りでございましたよ」

お松の話は、成程恐ろしく重大です。

「それを店中の者が聽いてゐたのか」

「町内中に響くやうな聲でやるんですもの、耳を塞いでゐても聽えます」

「それから若旦那の久太郎はどうした」

「お氣の毒なことに、スゴスゴと歸りました。そつと覗いて見ると、泣いてゐた様子でございます」

この聞込みは平次に取つては餘つ程重大だつたらしく、お勝手を出ると直ぐ、店の方から番頭の五助を呼んで來させました。

「番頭さん、隱さずに言つて貰ひ度いが――」

「ヘエ、ヘエ、決して隱し事はいたしません」

五助は何やら不安らしく平次を見上げて、滅茶々々な揉手をして居ます。

「昨夜、若旦那の久太郎が歸つて行つた時刻は？」

「かれこれ亥刻（十時）でございました」

「若旦那はひどく父親を怨んで居たことだらうな」

「いえ、とんでもない。若旦那はまことに氣の好い方で、男泣きに泣いて歸りました。小唄の師匠のお勝の情愛に引かれて、切れるには切れられず、さうかと言つて親旦那の御機嫌を直す工夫もなく、本當にお氣の毒でございました。でも、亡くなられた旦那様は、本心では若旦那の久太郎様が可愛くて仕様がなかつた様子でございます」

「ところで、昨夜福次郎は夜中に起出さなかつたのか」

平次は題目を變へます。

「一度も起きません。起きさへすれば、枕を並べて寢て居た私が氣が付かない筈はございません」

「二階からも、確かに甥の春松が降りては來なかつたのだな」

「ヘエ、梯子を引いて、その上、すぐ下には私と福次郎が寢て居りました」

「二階は一と間だけか」

「ヘエ」

これでは福次郎も春松も全く疑ひの圈外に立ちます。

四

「親分、若旦那は亥刻（十時）少し過ぎに六間堀に歸つて、小唄の師匠のお勝と泣いたり笑つたり夜半まで口説の擧句、到頭隣長屋から苦情が出たさうですよ」

ガラツ八の八五郎が、飛んで歸つての報告です。

「それから後は外へ出なかつたのだな」

「隣の隱居は、恐ろしくやかましい親爺で、――お蔭で一と晩一睡もしなかつた、若い者と壁隣に住むのは容易の難行苦行ぢやねえ――と大むくれでしたよ」

「よし、よし、六間堀はそれだけとして、今度は此處だ。家の中を

念入りに調べ上げたいがお前も手傳つてくれるか」
「何んでもやりますよ。親分」
「先づ最初は二階だ」
平次は八五郎と多吉をつれて、二階の六疊――曾(かつ)ての久太郎の部屋、この二三日は毎晩春松が閉ぢ込められたといふ部屋を覗きました。
「よくある術(て)だが、二階正面の格子がそつくり外れるやうな事はあるまいな」
「一々釘で打ち付けてありますよ。これぢや火事や地震の時困るだらう」
「火事や地震より、主人にして見れば道樂息子の方が怖(こは)かつたのさ」
「これぢや、脱け出す工夫はありませんね」
「先づむづかしいな」
平次と八五郎は掛け合ひ噺(ばなし)を續け乍ら、なほも念入りに部屋の中を調べました。
「疊は新しくない樣だが、近頃表替をしたか、大掃除(おほさうぢ)をしたらしいな」
「ヘエ」
「疊と疊の隙間に埃(ほこり)がハミ出して居るぢやないか――おや、爐(ろ)を切つてあるのか。若い者の癖に、炬燵(こたつ)でもしたんだらう」
平次はさう言ひ乍ら、まだ塞(ふさ)いだまゝの爐の蓋(ふた)、――小さい疊を起して見ると、その下は燒物の火入で、恐ろしく丁寧な掃除をしてあるのも、爐開きにはまだ季節が早いだけに、たしなみ過ぎる感じです。
押入を開けたが、何んにも目立つたものはなく、布團一と組と、脱ぎ捨てた春松の着物が二三枚あるだけ、それも男の獨り者らしく、妙に脂切つて、汚れ腐つて居るのが目立ちます。
「今度は階下(した)だ」
平次は五助を案内に、奉公人達の荷物を一つ〳〵見せて貰ひました。春松、お松、五助と、荷物は同じやうなもので、大して變つた物もありませんが、唯一つ、最後に開けた手代の福次郎の行李(かうり)の底から、主人の娘のお登世に宛てた、齒の浮くやうな戀文が、三本も五本も出て來たには、さすがの平次も顏を反けました。
當の福次郎は、このことあるを知つて、早くも姿を隱したらしく、其邊には影も形もありません。
「錢形の親分」
「何んだ、多吉兄哥(あにい)」
「あの野郎を擧げてしまひませうか」
「誰だ」
「福次郎の野郎ですよ」
多吉はさう信じきつてゐる樣子です。
「人でも殺さうといふ奴は、あんな極りの惡い手紙を、破りも燒きもせずに、行李の底に温めて置くものか。荷物調べが始まると、直ぐ人に讀まれるぢやないか」
平次の考へ方は穩當で常識的です。
「でも、裏の裏といふことがありますよ。福次郎が本當の惡黨なら、錢形の親分のやうな人に、さう思はせるために、わざと戀文位は温めて置きますよ」
「そんな事も考へられるだらう。が、福次郎は一と晩中番頭の五助の傍に居たんだぜ」

「宵とか、暁方とか、一寸でも五助が油斷をしたとしたら？」

「そんな事を言つては際限がないよ。春松にだつて、宵や朝には折があつた筈だし、下女のお松だつて、人を殺さないと限つたものでもあるまい。——待てよ、俺はもう少し番頭に訊いて見たい事がある」

平次は、何を考へたか、もう一度五助と福次郎の寢た部屋に戻つて、店に行つた番頭を呼び寄せました。

「何にか御用で、親分さん」

「近頃二階の五疊の疊の表替か、大掃除でもしたのか」

「いえ何んにもいたしませんが」

五助はけげんな顏をして居ります。

「それから昨夜久太郎が呼付けられて、ひどく主人に叱られたといふことだな」

平次の問ひは急に方向を變へます。

「ヘエ」

「隱さず言つてくれ。その久太郎が主人の本當の子でないといふことは、昨夜まで誰も知らずに居たことか」

「いえ、皆んな存じて居りました。御主人の手前知らない分にして居ただけのことで——」

「本人の久太郎も、妹のお登世もか」

「ヘエ」

「奉公人も知つて居たのか」

「いえ、知つて居るのは古い奉公人だけでございます」

「それを又昨夜、何んだつて主人が久太郎を呼び付けてそんな話をしたんだ」

「小唄の師匠と手を切らせようといふ親心でございます。あゝでも言つたら、若旦那樣が考へ直すかと思つたのでございませう。實の子ではないと申しても、大旦那樣にして見れば藁のうちから育てた若旦那樣が可愛くてならないのでございます」

「そんな事もあるだらうな。ところで、話は變るが、お前さんは此店へ毎晩泊つて居るのか」

平次は突如として話題を變へました。

「いえ、私は通ひでございます。家は四つ目にありますが、仕事の忙しい時や、ひどく遲くなつた時は、よくお店に泊ります」

「泊る日は極つて居ないわけだな」

「月に五度や六度は泊りますが、仕事の都合で、晝のうちにその晩泊る時は、家まで小僧を使にやります」

「すると昨日も、晝のうちから店の者にはお前が泊ることがわかつて居たのだな」

「ヘエ」

「下手人が家の者だ、——お前が泊るのを知つて居て、わざとその晩、お前に番人をさせて主人を殺した手口は恐ろしいな」

平次は斯う獨り言のやうに言ふのです。

五

「極りを惡がらずに、打ち明けて貰ひ度いが——」

「——」

平次が最後に逢つたのは、娘のお登世でした。二十歲といふ此節の相場では、嫁ぎ遲れの薹の立つた娘ですが、見たところは十八九

の幼々しさで、その豊かな頬にも、鈴を張つた眼にも、小さい口許にも、町娘の可愛らしさが溢れます。

「父親を害めた下手人が、お前の口一つで捕まらないやうになるかも知れない。解るか、俺の言ふことが――」

娘心の秘密を覗くことが出來れば、大概のむづかしい捕物は、朝陽の前の霧のやうに解決することを平次は知つて居たのです。

「よくわかりました、どんな事でも申上げます」

思ひ定めた様子で、お登世は可愛らしい顔を振り仰ぎました。

「先づ、何より先に、お前は久太郎と本當の兄妹でないといふことを、何時頃から知つて居る」

「小さい時でした。乳母がそつと教へてくれたんですもの」

「その久太郎とお前が、末は夫婦になるつもりで居たのだな」

「あれ親分さん」

お登世は眞赤になりましたが、決してそれを否定したわけではありません。

「お前の口からは言ひにくからう、俺の言ふことに返事をしくれさへすれば宜い」

「――」

「その矢先――久太郎は小唄の師匠のお勝に逆上て、親から勘當されるやうになつた。お前はそれを心配して、いろ〳〵取なしたが、うまく行かなかつた。――現に昨晩も、父親に久太郎を呼寄せさして、お勝と切れさせようとしたが――」

「親分、私はそんなにまでは――」

「よい〳〵、口で言はなくても、心で思つただけでも宜いのだ。父親は娘の心持を察して、久太郎を呼寄せて意見をしたのだらう」

「――」

お登世は默つて俯向きました。いぢらしく可愛らしい姿です。鹿の子絞りの襟に白い頤を埋めて――。

「春松と福次郎が、何彼とお前に附き纏つたが、お前の心には久太郎があるので、お前は取合はなかつた、――さう思つて宜いだらうな」

「――」

お登世は默つてしまひました。見ると、小娘らしく袂に顔を埋めて、身も浮くばかりに泣いて居るのです。

泣きひたる娘をそつとして置いたまゝ、平次は廊下に滑り出て居りました。

「八、來い。面白いものを見せてやる」

「下手人が判つたんですか親分」

「大概見當は付いたつもりだ。――その踏臺を持つて來て、春松の寢て居た二階の下の部屋の、押入寄りの隅へ置いてくれ。そして、お前は其邊を見張つて居るのだ、宜いか」

平次は言ひ捨てて二階へ登りましたが、暫らく何やらゴソゴソ作業をして居たと思ふと、いきなり階下の部屋の押入寄りの隅の天井板がスーツと動いて、其處から伸びた二本足が、八五郎が置いた踏臺を探して居るではありませんか。

「あツ」

八五郎が驚く間もありません。踏臺を探り當てて、身輕に降り立つたのは、何んと錢形平次の埃も被らぬ、ニヤニヤした顔だつたのです。

「よく掃除してあるよ、蜘蛛の巢一つありやしない」

「曲者は其處から降りたんですか、親分」

「外に道はないよ。二階の炬燵を拔いて此處へ降り、廊下へ出て、若い女共の寢込んでゐる部屋の前を、主人の部屋へ忍んで行くのは何んでもない——お勝手から刺身庖丁を取出して、主人を刺すと、又元の道を二階に歸つて、知らん顏をして居たのだ——踏臺は翌る朝片付けたつて、誰が氣付くものか」

平次が八五郎に説明して居る時でした。外からけげんな顏をして飛込んで來た多吉が、

「錢形の親分、親分は本當に〳〵春松に言ひ付けて、お登世を伯母さんの家へ送り届けたんですか」

「え、俺はそんな事を言つた覺えはないが」

平次は何にか知ら愕然としました。

「たつた今春松は、嫌がる娘をつれて、竪川の伯母さんの家へ行くんだと出て行きましたよ」

「そいつは大變だ、——春松は俺が二階から降りたのを見たんだらう、——あいつが下手人だ、——娘が危ない」

平次のあわてやうは大變でした。

「それツ」

と八方へ人を走らせる眞最中。

「春松がお登世を何うかしたといふぢやありませんか」

汗になつて馳け付けたのは若旦那の久太郎です。二十三といふ若盛り、純情家らしくて危な氣はありますが、その代り世辭も驅け引もないと言つた、生一本の良い男です。

「久太郎か、——お登世が危ない。春松の主殺しがばれたので、捨鉢になつてお登世をさらつて行つた」

言葉せはしく説明する平次。

「あの野郎の巢はわかつて居ます。私が行つて妹をつれて來ませう」

飛んで行く久太郎の後ろ姿を見送つて、

「八、お前も行け、あの男だけでは心細い。腕も惡智慧も、春松の方が上は手だ」

「合點」

八五郎を飛ばせる平次だつたのです。

× × ×

その時はもう薄暗くなりかけて居りました。竪川筋のとある材木小屋につれ込まれたお登世が、春松の執拗な邪惡な戀の前に、あはや命も處女も奪はれかけて居るところへ、若旦那の久太郎は、鐵砲玉のやうに驅け込んだのです。

二人の爭ひは深刻で無殘でした。叩き合ひ、むしり合ひ、上になり下になり、息も絶え〳〵〃〵に爭つた揚句、ほんの少しばかり力の劣つた久太郎が、春松のために組敷かれて、逞ましい角材で打ち殺されやうとしたのを、今度は半死半生の目に逢つたお登世が、必死の力を振り絞つて春松の腕に噛り付きました。

此爭ひは何時果つべしとも思へなかつたのですが、幸ひ驅け付けた八五郎が間に合つて、その猛烈な戰闘力を役立たせ、久太郎と力を協せて猛り狂ふ春松を犇々と縛り上げたことは言ふまでもありません。

この厄介な捕物が一段落すむと、興奮と疲勞と恐怖とにヘトヘトになつた久太郎とお登世は、何方からともなく這ひ寄りました。そして極めて自然に、——十何年の昔に返つた心持で、互に犇とその手を取り合つてゐたのです。

何も彼も濟んで、下手人の春松を石原の子分衆に引渡した平次は、八五郎と一緒に、夕闇の中を神田の家へ急いで居りました。

「何んだつて春松が叔父に當る主人を殺す氣になつたんでせう」

八五郎は相變らず事件の説明をせがみました。

「自分の不始末がバレて、叔父の信用がなくなり、その上お登世に嫌はれて常陸屋の跡取りになる望がなくなつたからさ。叔父の久左衞門は、實の子でないと言つても、正直者で人柄の良い久太郎が好きだから、いづれは勘當を許すことになるだらうと思つたのだらう」

「それにしても、二階から炬燵を抜いて、階下へ降りた工夫には驚きましたね」

「わざ〳〵梯子を引かせた上、番頭の泊つた晩にやつたのはあの男の喰へないところだ、——下手人が家の者と解つてゐるし、番頭でも福次郎でも、娘でも下女でも、ないとなると、春松を疑つて見るのが順當だが、あんまり細工がうまいので、ツイ騙されたよ」

「若旦那とお登世はどうなるでせう」

「いづれ一緒になるだらうよ——お前が氣をもむまでもあるまい。海千山千の小唄の師匠よりは、幼な友達の許婚の方がよかつたのさ、娘心は正直だ。お登世が春松を嫌つて、久太郎に焦れたのも無理はないよ」

平次はさう言ひ乍ら、胸をはだけて大川の水面を吹いて來る秋の夜風の爽やかさを享樂するのでした。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十巻　狐の嫁入」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年11月15日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋新社
　　1948（昭和23）年2月号
※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年3月4日作成
2017年3月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

お登世の戀人

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/